



# 大学生の主観的適応と対人場面における 主張性との関連<sup>1)</sup>

中 野 修

(立命館大学大学院人間科学研究科博士課程後期課程)

The relation between university students' subjective adaptation and their aggressiveness in a personal interaction situation

NAKANO Osamu

(Doctorate Program, Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University)

The relation between university students' subjective adaptation and their individual personal and environmental factors was examined.

The author believes an individual's personality characteristics are important factors in how one regards their environment, and that the personality characteristic of aggressiveness, which is believed to be an important factor in personal relationships, may potentially affect one's subjective adaptation.

For this reason, this paper examines factors that influence students' subjective adaptation, with a focus on one aspect of individuals' personal characteristics, through a psychological examination.

The author discusses male university students' aggressiveness in personal relationships, based on an adaptation scale for young adults to measure their subjective adaptation and on a P-F study for young adults, a projective technique to measure their aggressiveness in personal relationships.

A set of findings suggested that the number of assessable situations of (24-U), N-P, O-D, I-A and E-A, and their superego factor of  $\bar{E} + \bar{I}\%$  are related to their subjective adaptation.

Therefore, the results of this study indicate that traits related to subjective adaptation are personality characteristics with which a university student: 1) can express one's feelings, engaging in a frustrating situation rather than avoiding it; 2) considers if one is responsible for any problem occurring, and can honestly apologize if it is attributable to oneself; 3) can proactively tackle a problem to resolve one's frustration; and 4) can assert oneself legitimately when required.

大学生の適応に関して、主観的適応については、個人的要因と環境的要因それぞれとの関連が検討されている。筆者は環境をどう捉えるかには個人の人格特性なども重要で、対人関係において重要になってくると思われる、自身の人格特性のひとつである主張性が、主観的適応に影響を与えるのではないかと考えた。そこで個人の人格特性の一側面に焦点を当て、心理検査を用いて大学生の主観的適応を左右する要因を検討することとした。主観的適応を測る青年用適応感尺度と、対人関係における主張性を測る、投映法であるP-Fスタディ青年用から、男子大学生の対人関係における主張性について考察した。一連の結果から、判定可能な場面数(24-U)、N-P、O-D、I-A、E-Aと超自我因子 $\bar{E} + \bar{I}\%$ が主観的適応に関連していることが示唆された。そのため、1、欲求不満場面において、回避せずにその場にかかわり、自分の気持ちを表現出来ること。2、問題が起きたときに、自分に責任がないか考え、自分に非があったときは素直に謝罪が出来ること。3、欲求不満の解消を求めて、問題に対して自分から働きかけられること。4、必要な場面で正当な主張が出来るという性格特性が、主観的適応と関連している特徴として挙げられた。

註 ※1 当論文は金沢工業大学大学院心理科学研究科修士論文の一部である

1) 金沢工業大学大学院心理科学研究科

Kanazawa Institute of Technology Graduate Program in Clinical Psychology

**Key Words** : Adolescence, Aggression, P-F Study, Adaptation, Subjective adaptation

キーワード : 青年期, 主張性, P-F スタディ, 適応, 主観的適応

## 適応とは

適応とは、佐々木 (1992) は、「適応 (adjustment) とは、生体が環境からの要請に応じるのと同時に、自分自身の欲求をも充足しながら、環境との調和した関係を保つことをいう」と述べている。また大久保 (2010) は、「適応 (adjustment) は、環境からの影響を受けるだけの順応 (adaptation) とは異なり、生体の側からの環境に対する積極的な働きかけの意味を含んでいる」と述べたうえで、「適応は個人と環境の調和の状態だけでなく、個人と環境の調和に至る過程をも含む概念である」と述べている。つまり、適応は、個人が環境に働きかけることによって、環境と調和している状態、また、個人が環境との調和を得ようとする過程を含む概念と考えられる。

個人が環境に適応出来ている状態を、佐々木 (1992) は、「生体が環境からの要請に応じ、自己の欲求を満たし、環境との調和した関係を保っている状態」と述べ、「満足を感じず、環境との調和も保てず、さらに心身の問題が生じている状態」が、個人が環境に出来ていない不適応状態であると述べている。困難が生じたときに、妥当な解決方法を用いることによって環境に調和することが、適応においては重要であると考えられる。不適応と不適応感とは同義であり、そして適応には主観的適応と客観的適応がある。主観的適応とは、自らが評価する適応状態のことであり、適応状態の1指標であると考えられている。

## 主観的適応, 適応感とは

大久保 (2010) は、「適応状態の測定に関する研究は、他者評定による客観的適応状態に関する研究と自己評定による主観的適応状態の測定に関する研究の2つに大別できる」と説明しており、大久保 (2004) は、「これまでよく取り上げられてきた適応の判断の指標としては、大学生が適応できている状態は学業成績が優れている、対人関係がうまくいっ

ているという客観的あるいは外的な基準で捉えられてきたが、大学生自身が自分の置かれている環境をどう捉えているかということが重要である」と述べている。さらに、大学生の適応を考えるうえで、学生の適応状態には、教師などの他者が評価する客観的適応ではなく、適応状態を学生が自ら評価する主観的適応が重要であるとしている。

太田 (2004) は、意欲低下の変化と対人関係認知の検討において、他人とうまくやっていく自信が高まるのが、大学生活に対する適応感を高めることを明らかにしている。また、太田 (2006) は、大学環境への適応感と意欲低下の影響の検討をした結果、大学生活の中でやるべきことが見いだせないことが大学や学業への意欲低下に結びつくと述べている。

石田 (2003) も、従来の学校適応の研究では、環境と個体との関係に焦点をあてた研究と、課題に対する主観的な認知や評価、感情に焦点をあてた研究がされており、2つの異なる観点から検討されてきたと述べている。さらに、石田 (2006) は、学校への適応を個体の側から捉えると、「環境と個体が適合していない状態は個体に対してさまざまなネガティブな反応を引き起こすと考えられる」と述べている。

これらのことから、他者が適応状態を判断する客観的適応だけではなく、適応状態であると本人が感じ、現在の状況に満足しているかという主観的適応が重要であると考えられる。

## 主観的適応における個人変数および環境変数との関連

従来の主観的適応の予測に関する研究は、個人変数からの予測による研究と、環境変数からの予測による研究の2つに大別できる。

主観的適応と環境変数との関連では、嶋 (1992) の研究では、ソーシャルサポートという環境因子が大学生の適応にどのような影響を及ぼすのかという

ことを考察しており、男子はセルフエスティームや統制感が脅かされない家族や異性の友人などとの関係、女子は物理・身体的ストレスがあまり高くない状況では、家族サポートがストレスへの対処に役立つという結果が出ている。

植村・小川・吉田(2001)の研究においては、環境変数として、大学生の心理社会的適応のための予防的プログラムの教育効果を検討した研究がある。その研究では、学生生活で満足感を得る上での友人関係の重要性を指摘し、自分の身近にいてくれる友人関係の形成が、大学生活で適応するためのひとつの要因であると考察されている。

主観的適応と個人変数との関連では、山田(2006)は大学新生に焦点をあて、意欲減退傾向と大学生生活不安傾向の2つの側面から大学生活への適応感を調査した研究をおこなっている。そこでは大学生の学校への適応において、不本意入学が退学・休学の重要な要因になっていることが考えられ、個人の大学への違和感が学校への適応にも関係しているのではないかと考察している。

このように先述した先行研究は、大学生の適応感、大学生生活と密着したものである。例えば、先行研究(太田・甲村・児嶋, 2008; 今林・有馬・川畑, 2009)では、大学生活における意欲や社会的スキルと適応感をあわせて測定したものがみられた。個人の人格特性に焦点をあてた研究では、石本(2010)は、学校という「居場所を他者との関係に対する意味づけであると捉える場合、個人のもつ複数の対人関係のそれぞれの質によって居場所であると感じる程度(居場所感)の高さや重要性が異なる」と考察しており、個人が「居場所」と感じることで、それを感じられる感性、つまり個人特性が重要ではないかと考えられる。そのため、個人の人格特性と主観的適応の関連を検討する余地があると思われる。そして人格特性のなかに、他者との関係のあり方として考えられる特徴は多く考えられるが、先述の石本(2010)で述べられているように「対人関係のそれぞれの質」というものも関係していると思われる。対人関係においての特徴のひとつである「質」のなかには、他者と関わり合うために、自分自身の考えや意見を何らかの形で適切に主張することも必要になってくる

のではないかとと思われる。つまり、主張することは友人関係をはじめとする対人関係には必要であると考えられる。そのため、円滑な対人関係を築くという点で、個人の適応には重要なものと推察される。そして先行研究においては、個人の主張性という観点から主観的適応を検討した研究はみられなかった。

## 青年用適応感尺度の概要

大久保・青柳(2003)は、個人変数もしくは環境変数から主観的適応を予測するのではなく、個人と環境の適合性の視点から主観的適応を捉え、主観的適応を「個人が環境と適合(フィット)していることと意識すること」と定義した。そして、個人と環境の適合性の視点から個人の主観的適応を測る尺度として、大久保(2005)によって、青年用適応感尺度が開発された。

青年用適応感尺度は、「居心地の良さの感覚」尺度(「周囲に溶けこめている」「自由に話せる雰囲気である」など)、「課題・目的の存在」尺度(「やるべき目的がある」「好きなことができる」など)、「被信頼・受容感」尺度(「周りから頼られていると感じる」「存在を気にかけている」など)、「劣等感の無さ」尺度(「周りに迷惑をかけていると感じる」「自分だけだめだと感じる」など)の4つの下位尺度から作成されており、質問項目数は「居心地の良さの感覚」尺度11項目、「課題・目的の存在」尺度7項目、「被信頼・受容感」尺度6項目、「劣等感の無さ」尺度6項目の全30項目で構成されている。評定は「全くあてはまらない」1点、「あまりあてはまらない」2点、「どちらともいえない」3点、「ややあてはまる」4点、「非常によくあてはまる」5点の5件法であり、「劣等感の無さ」尺度の6項目のみ、すべて逆転項目となっている。得点は、最低点が30点、最高得点が150点である。

一連の、大久保の研究(大久保, 2004, 2005; 大久保・青柳, 2003, 2005)では、個人変数からの適応状態の予測は、ある種の特徴が望ましいものとして絶対化されることにつながり、望ましい特徴に向けて介入や教育がされはじめる恐れがあることを指摘してい

る。そして、適応の問題を内面の問題としてではなく、関係の問題として予測し、理解する必要があると述べている。また、個人変数と環境変数の両方を測定したとしても、適応の定義である個人と環境との関係を記述していることにはならないと説明しており、個人変数と環境変数の関係や相互作用を記述し、適応状態を予測する必要があると述べている（大久保, 2010）。

大久保・青柳（2003）により、主観的適応は、「個人が環境と適合（フィット）していると意識すること」と定義されているが、環境をどう捉えるかには個人の人格特性などの個人変数も重要で、対人関係において重要になってくると思われる、筆者は個人の人格特性のひとつである主張性が主観的適応に影響を与えるのではないかと考える。

主張性と適応との関連についても研究のほかにも、主張性のみに焦点をあてた研究が行われているが、例えば、鈴木・新井（2014）は大学生の調査において、他者配慮と自己表明、外的適応、内的適応について質問紙調査をおこなっている。結果の一部として、主張性のひとつである自己表明は、外的適応の友人関係の良さならびに対人的疎外感の少なさに対して効果がみられたと考察している。渡部（2010）は、高校生の主張性の要件と友人関係における行動および適応との関連を検討している。

他には、塚田（2014）の、ソーシャル・スキルの効果評価コミュニケーション能力向上を目的として体験学習の実践をおこなった研究がある。その研究では出席回数の多い学生において主張性スキルの向上が示唆されたと述べられている。

青年用適応感尺度を使用した研究としては石本ら（2009）の、青年期女子の友人関係のあり方と、心理的適応や学校適応の関連を考察した研究がある。八木（2016）は、男子大学生を対象に対人関係の困り感と適応感、自尊感情との関連について検討している。また、磯部・上村（2007）の研究では、大学への進学動機と学校適応感との関連を検討するために、青年用適応感尺度が用いられている。これらのように、青年用適応感尺度は、個人的要因に焦点をあて、適応状態の測定を行った研究に用いられており、また個人の対人関係のあり方に焦点があてられ

ているものがみられる。そのため、主観的適応には、対人関係の取り方などが重要ではないかと筆者は考えた。そして、個人の人格特性の中でも、特に対人場面という環境への反応の特徴が、主観的適応に関連しているのではないかとされた。また、対人関係のあり方に重要であると思われる特徴は多く考えられるが、個人の主張性という観点から主観的適応を検討した研究はみられなかった。

主観的適応を測定する際に青年用適応感尺度を用いた先行研究では、概観する限り、全て質問紙と青年用適応感尺度を組み合わせて検討する方法が取られており、投映法による心理検査は使用されていない。

そのため、対人場面における個人の主張性の特徴を捉えるにあたっては、従来の質問紙を用いる方法ではなく、従来使用されていなかった投映法、なかでも、Picture-Frustration Study（以下 P-F スタディ）を用いる。投映法の人格検査は質問紙法よりも、さらに意識的に操作できない面の反応をみることが出来、なかでも、P-F スタディは、前意識を測ることが出来るテストであるため、筆者は対人場面での反応、態度が質問紙では見られない側面を見ることが出来る検査のひとつと考えた。P-F スタディは、その検査の特性から、対象者に対して、心理的な負担が少なく、受検しやすい検査でもある。

## P-F スタディの概要

P-F スタディ（Picture-Frustration Study：絵画欲求不満テスト）は、Rosenzweig, S. (1978) によって作成された、投映法の人格検査である。

P-F スタディの反応分類に関して、aggression という用語が用いられている。aggression は一般に、「攻撃」と邦訳されているが、Rosenzweig は「主張性」という広い意味で定義をしている。秦（2010）は、Rosenzweig による aggression の定義について「“aggression” の基本的な意味は主張性(assertiveness)であり、生存を維持するために、あるいは究極的な目標達成と現在の不安定な状況間に存在する障害を克服するために、目標に向かって前進し、処理することである」と説明している。つまり、aggression

には、攻撃性だけではなく、その場面においてふさわしい、適切な主張、建設的な主張なども含まれるため、攻撃性を含む「主張性」と定義がされている。そこで本研究でも、aggressionを「主張性」と表現する。

欲求不満場面での主張性の反応分類には、方向と型があり、主張性の方向は、主張性が外部に向けられる「他責 (Extraggression; 以下 E-A)」、内部に向けられる「自責 (Intraaggression; 以下 I-A)」、どちらにも向けられないで回避される「無責 (Imageression; 以下 M-A)」の3つである。

主張性の型は、欲求不満によって生じた事態に向けられた反応である「障害優位 (Obstacle-dominance; 以下 O-D)」、欲求不満によって生じた心理的不安定を回復するために、自分や他者に向かってなされる自我防衛的で直接的な対人的対処反応である「自我防衛 (Ego-defense; 以下 E-D)」、欲求不満によって阻害された欲求の充足を求める固執的反応である「欲求固執 (Need-persistence; 以下 N-P)」の3つがある。これらは欲求不満によって生じた反応が向かう対象、目標、領域など、受検者が関心を向ける志向性と関連している。これらの主張性の方向と型の組み合わせによる6つの領域をカテゴリーと称している (秦, 2010)。P-F スタディには主張性の方向と主張性の型がある。主張性の方向とは3方向があり、それぞれ主張性が他者に向かう反応である他責、自分自身に向かう反応である自責、どちらも回避される反応である無責である。そして主張性の型には、3つがあり、それぞれ、欲求不満が生じたときに主張性がどこに向くかということを表している。欲求不満を感じさせた事態に向かう反応の型、自分を含め、人に対して向けられる反応の型、欲求の充足を求める反応の型である。

主観的適応に必要な対人関係の取り方について、太田・甲村・児嶋 (2008) は「新規な環境においては新たな対人関係を築く努力をする必要があり、そこでは適切に自分を伝えていくことが求められる」と述べている。また、渡部 (1999) は「社会的スキルや認知された対人的コンピテンスがあまり高くない人は、対人関係から逃避することによって、他者からの直接的な拒絶や批判を回避し、自己を防衛し

ているのかもしれない」という。そのため、人とのかわりについての自分自身の特徴や反応が、主張性の方向によって把握できると思われる。また、主張性の型について、欲求不満事態における、自分自身の感情的側面や対人的対処、建設的反応を把握することが出来る。

## 目的

本研究では、投映法のひとつである P-F スタディを用いて、個人の人格特性のうち対人場面における主張性に焦点をあて、大学生の主観的適応を左右する要因を検討することを目的とする。

## 方法

### 青年用適応感尺度と P-F スタディの実施 研究参加者

A 大学の1,2年生, 男女90名である。本研究では、主観的適応を測る尺度は、質問項目を学生が理解しやすいと考えたことから、大学生の学生生活における適応状態を測定することとした。

90名のうち、青年用適応感尺度に無記入の質問項目があった1年生男子1名と2年生男子1名の計2名と、P-F スタディ青年用において判定不能であるUスコア; 以下U) が6場面以上あった1年生男子1名は、分析の対象から除いた。その結果、不備のあった3名を除外した87名の内訳は、1年生男子43名 (平均年齢19.0歳, 標準偏差0.60)、1年生女子13名 (平均年齢18.9歳, 標準偏差0.28)、2年生男子23名 (平均年齢20.0歳, 標準偏差0.46)、2年生女子8名 (平均年齢19.9歳, 標準偏差0.64)であった。ただし今回は、女子の人数が少ないので、男子のみ (66名) のデータを用いて分析を行った。

本研究では、P-F スタディ青年用を用いて、研究参加者の主張性を測る投映法の検査として使用した。

## 実施手続き

学部の講義を担当している教員に調査の実施を依

頼した。実施に了解を得られた教員の講義時間の中で大学生に協力を依頼し、同意を得られた者に青年用適応感尺度と P-F スタディ青年用を実施した。調査は、学年ごとに別々の日時に、以下の実施手続きで行った。

青年用適応感尺度と P-F スタディ青年用を実施する前に、修士論文でデータを使用するための協力を依頼した。まず青年用適応感尺度を配布し、実施日、氏名、年齢の記入と、性別に○をつけてもらった後、青年用適応感尺度の表紙に書かれている教示を読みあげた。質問用紙は、正式名称である「青年用適応感尺度」ではなく、「大学生活へのアンケート」に変更した。それは、質問項目へ率直に回答する抵抗を軽減するためである。質問紙の表紙に、『この質問紙の回答結果については研究のみに使用します。また、その内容は集団のデータとしてあつかい、個人のプライバシーは厳守されます。ひとつの項目もぬかさず、すべての項目にありのままに答えてください。』を記し、口頭で、秘密保持、データの使用範囲、成績には関係ないことを教示の際に説明し、インフォームド・コンセントを取った。青年用適応感尺度を集団実施した後、続けて P-F スタディ青年用を実施した。

## 結果

### 青年用適応感尺度と P-F スタディ青年用の関連 青年用適応感尺度の下位尺度得点および総合計と P-F スタディ青年用の各変数との相関の結果

青年用適応感尺度の各下位尺度得点と P-F スタディ青年用の各変数の相関を求めた。P-F スタディ青年用から採用した変数は、11 種類の因子 (E', E, E, e, I', I, I, i, M', M, m) の前半、後半の各得点と前半、後半の合計得点、主張性の方向 (E-A, I-A, M-A)、主張性の型 (O-D, E-D, N-P)、GCR のほか、自己の責任を否認する反応である E, 超自我阻害場面における言い訳の反応である I, 自己の正当性を主張するために、何らかの理由を述べている反応である E+I, 素朴で衝動的な攻撃を示す反応である E-E, 素直に自己の責任を認める傾向を示す反応である I-I, 相手に対する弁護や言い訳による自

己弁護の反応である (M-A) + I の 6 種類の超自我因子の各得点と、判定可能な場面数 (24-U) である。GCR は標準的な反応と受検者の反応がどの程度一致しているかを大まかに示す指標であり、U 反応とは、スコアによる分類ができない判定不能な反応である (満田 2009)。判定可能な場面数 (24-U) は、全 24 場面中の反応の、スコアによる分類が出来る反応であり、明瞭な反応を意味する。全 24 場面の前半と後半の 12 場面ずつで得点を算出するのは、前半と後半の反応傾向を比較することによって、テスト中における心理的な構えの変化をみる反応転移という指標が設定されているためである。

青年用適応感尺度の得点と P-F スタディ青年用の各変数との間には以下のような相関がみられた (表 1)。

「居心地の良さの感覚」尺度と、主張性の型、方向などの変数には有意な相関は認められなかったが、「判定可能な場面数 (24-U)」( $r=.265, p<.05$ ) のみ、正の相関がみられた。

「課題・目的の存在」尺度と、「判定可能な場面数 (24-U)」( $r=.354, p<.01$ ) に正の相関があった。また、欲求不満によって生じた事態に対する被害の程度を訴える反応である「O-D%」( $r=-.257, p<.05$ ) と負の相関があった。O-D と対極の反応である、問題解決の意欲と関係している「N-P 前半」( $r=.330, p<.01$ )、  
「N-P 後半」( $r=.308, p<.05$ )、  
「N-P 合計」( $r=.368, p<.01$ )、  
「N-P%」( $r=.344, p<.01$ ) と、N-P の中に含まれる「i 前半」( $r=.256, p<.05$ )、  
「i 合計」( $r=.283, p<.05$ ) と正の相関が認められた。O-D と N-P はともに主張性の型であり、「課題・目的の存在」尺度が高くなると O-D は少なくなり、反対に N-P が多くなることが分かった。「被信頼・受容感」尺度と、超自我因子「E+I%」( $r=.308, p<.05$ ) に正の相関が認められた。「劣等感の無さ」尺度と、全 24 場面中の前半、12 場面に出た I-A の反応の合計である「I-A 前半」( $r=.296, p<.05$ ) に正の相関が認められた。

「総合計」と、「判定可能な場面数 (24-U)」( $r=.318, p<.01$ )、  
「I-A 合計」( $r=.248, p<.05$ )、  
「N-P 合計」( $r=.245, p<.05$ )、  
超自我因子「E+I%」( $r=.248, p<.05$ ) に正の相関が認められた。

表1 青年用適応感尺度と相関のあった P-F スタディ青年用の変数

( ) 内は相関係数

尺度	1, 2年生男子 66名
居心地の良さの感覚	判定可能な場面数 (0.265*)
課題・目的的存在	判定可能な場面数 (0.354**)
	i 前半 (0.256*)
	i 合計 (0.283*)
	O-D% (-0.257*)
	N-P 前半(0.330**) N-P 後半(0.308*)
	N-P 合計 (0.368**)
	N-P% (0.344**)
被信頼・受容感	超自我因子 E+I% (0.308*)
劣等感の無さ	I-A 前半 (0.296*)
総合計	判定可能な場面数 (0.318**)
	I-A 合計 (0.248**)
	N-P 合計 (0.245*)
	超自我因子 E+I% (0.248*)

\* $p<.05$  \*\* $p<.01$

青年用適応感尺度の下位尺度得点および総合計と P-F スタディ青年用の各変数との U 反応の分析

「居心地の良さの感覚」尺度と、主張性の型、方向の変数には有意な相関は認められなかったが、「判定可能な場面数 (24-U)」（ $r=.265, p<.05$ ）にのみ、正の相関がみられた。そのため、今いる環境を肯定的にとらえ、なじめているという感覚と、P-F スタディで判定不能になる反応が少ないということは関連があると考えられた。そこで、全 24 場面において出現した U 反応の質的分析を試みた。男子 66 名では、U の個数が 0 から 4 個の範囲で出現していた。U 反応が 0 個の者は 42 名、1 個の者が 12 名、2 個の者が 6 名、3 個の者が 4 名、4 個の者が 2 名であった。U が出現しなかった 42 名と 1 個以上出現した 24 名の 2 群で、青年用適応感尺度の得点で比較した

結果を、表 2 に示した。

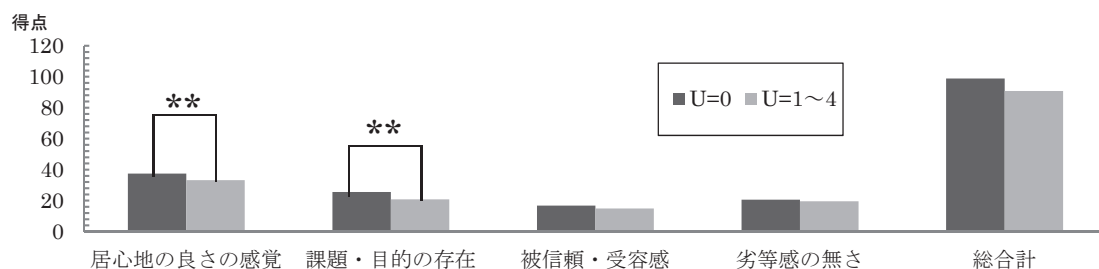
U 反応が 1 個以上あった 24 名と、U 反応のない 42 名の青年用適応感尺度の得点を比較し、 $t$  検定をおこなったところ、U 反応のない 42 名は、「居心地の良さの感覚」尺度と「課題・目的的存在」尺度において、U があった 24 名よりも有意に高い得点を示した (図 1)。また、U が出現した場面は 4, 18, 19 を除く 21 種の場面であり、最も多く U が出たのは場面 14 の 6 つ、次いで場面 7 と場面 17 の 4 つであった。

表 2 P-F スタディ青年用の U 反応の個数と 青年用適応感尺度の平均値の関係

( ) 内は標準偏差

U の個数	居心地の良さの感覚	課題・目的的存在	被信頼・受容感	劣等感の無さ	総合計
0	37.36	25.48	16.76	20.57	98.76
(N=42)	(6.17)	(4.90)	(4.63)	(4.47)	(16.59)
1~4	33.21	20.75	14.83	19.50	90.75
(N=24)	(6.99)	(5.60)	(4.69)	(4.64)	(17.66)

本研究では、満田ら (2009) の研究に基づいて、U 反応の内容を「単純了解反応」「場面理解失敗反応」「説明不足反応」「意味不明反応」の 4 つのカテゴリーに分類した。その結果、単純了解反応が 3 個、場面理解失敗反応が 10 個、説明不足反応が 11 個、意味不明反応が 10 個あった。U 反応を多く出す人に、特定の内容の U 反応が偏るということはなかったが、U 反応は説明不足や場面認知の誤りなどであり、相手との会話のやりとりが出来ていないことを意味する。「判定可能な場面数 (24-U)」は、「課題・目的的存在」尺度 ( $r=.354, p<.01$ ) と、「総合計」 ( $r=.318,$



\*\* $p<.01$

図 1. U 反応の有無による青年用適応感尺度の得点の比較

$p < .01$ )でも相関がみられたため、明瞭な回答が出せるということは、主観的適応と関連があるのではないかと考えられる。「課題・目的的存在」尺度と、「O-D%」( $r = -.257, p < .05$ )に負の相関があった。N-Pに関連する4つの変数と、N-Pに含まれる、「i前半」( $r = .256, p < .05$ )、「i合計」( $r = .283, p < .05$ )と正の相関が認められた。そのため、課題や目的があることによる充実感の高さはN-Pやiに示されるような、自主的に問題解決のために働きかける傾向と関連があると考えられる。反対に、O-Dに示されるような、欲求不満によって生じた事態に対する被害の程度を訴えるという傾向は少なくなるといえる。「被信頼・受容感」尺度は、超自我因子「E+I%」( $r = .308, p < .05$ )との間のみ正の相関が認められた。E+I%は自己の正当性を主張するために、何らかの理由を述べているということを表しており、低すぎる場合に問題となる。

ここで、本研究におけるE+I%の、EとIの内容が状況に則した正当な主張であるか内容分析を行った。言語反応では、EとIの反応の例として、場面6の、図書館の職員が2冊以上手にしている女性に、1度に2冊しか借りられない規則になっている場面で、Eの反応を出した者は1名だけで、「友だちの分です。」という反応であった。場面6でIの反応であった者は5名であり、「そうなんですか ごめんなさい知らなくて2冊にしますね」や「そうですか、これは失礼 初めての利用だったので」などがあつた。Iの反応があつた者が、規則を知らなかったと弁明しているのに対し、このEの反応は指摘を素直に受け入れず、自分の非を否定するような反応であった。

場面19の、白バイの警察官が男性に、スピード違反をしたと声をかけている場面では、スピードを出していたことの原因(急いでいたなど)を述べて、Iの反応になることが多い。Eの反応を出している者もいたが、指摘されたことへの反論としても論理性を欠いており、状況に則した反応とはいえないものであつた。これらの例外はあるものの、その他の反応は40場面中20場面がIの反応であつた。また、EにしるIにしる、その場に応じた主張を表明する内容であつた。

そのため、弁明してよい場面で、相手に対して攻

撃的にならず、正当な主張や弁明が出来るということとは関連があると考えられる。

### 主張性の方向によるタイプ別の青年用適応感尺度の各下位尺度の比較

P-Fスタディの主張性の方向の得点によって、研究参加者をそれぞれE-A型16名、I-A型16名、M-A型15名、不定型19名の4種類に分類した(表3)。その4群を独立変数、青年用適応感尺度の4つの各下位尺度得点を従属変数として、1要因分散分析を行った。その結果、「被信頼・受容感」尺度で、有意差が認められた( $F(4.11) = 4.26, p < .01$ )ので、Tukey法の多重比較を行ったところ、「I-A型 > E-A型」「不定型 > E-A型」という関係に、統計的な有意差が認められた(図2)。E-A型がいちばん低く、特に対極的なI-A、主張性の方向が偏らず、バランスのとれた不定型に比して低いという結果であつたため、欲求不満の原因を外部に向ける学生は、周囲から期待され、受容されている感覚を感じられていない傾向があると考えられる。

表3 E-A型、I-A型、M-A型、不定型の青年用適応感尺度の平均値および標準偏差と分散分析の結果(カッコ内は標準偏差)

	E-A型 (N=16)	I-A型 (N=16)	M-A型 (N=15)	不定型 (N=19)	F値
居心地の 良さの感覚	33.31 (7.13)	38.19 (6.79)	34.87 (7.02)	36.79 (5.68)	n.s.
課題・目的 の存在	22.44 (4.24)	25.25 (6.18)	23.40 (5.46)	23.89 (6.32)	n.s.
被信頼・ 受容感	12.88 (4.40)	16.94 (5.13)	16.07 (3.65)	18.00 (4.23)	4.26**
劣等感の 無さ	19.44 (5.86)	21.06 (4.68)	20.27 (3.86)	20.00 (3.77)	n.s.

\*\*  $p < .01$

### 主張性の型によるタイプ別の青年用適応感尺度の各下位尺度の比較

P-Fスタディ青年用の主張性の型の得点によって、研究参加者をそれぞれO-D型6名、E-D型27名、N-P型8名、不定型25名の4つの型に分類した(表4)。



表4 O-D型, E-D型, N-P型, 不定型の  
 平均値および標準偏差と分散分析の結果  
 (カッコ内は標準偏差)

	O-D型 (N=6)	E-D型 (N=27)	N-P型 (N=8)	不定型 (N=25)	F値
居心地の 良さの感覚	30.50 (7.01)	36.30 (7.16)	37.75 (5.75)	36.04 (6.23)	<i>n.s.</i>
課題・目的 の存在	21.33 (5.57)	23.44 (5.51)	28.88 (3.56)	23.04 (5.60)	3.01*
被信頼・ 受容感	12.83 (5.53)	16.74 (4.25)	17.63 (5.80)	15.60 (4.48)	<i>n.s.</i>
劣等感の 無さ	17.33 (5.92)	21.11 (4.35)	19.13 (5.62)	20.80 (3.88)	<i>n.s.</i>

\*  $p < .05$

その主張性の型を独立変数、青年用適応感尺度の4つの各下位尺度を従属変数として、1要因分散分析を行った。その結果、「課題・目的の存在」尺度のみで、主張性の型に有意差が認められた ( $F(2.75) = 3.01, p < .05$ ) ので、Tukey法の多重比較を行ったところ、「N-P型 > O-D型」「N-P型 > E-D型」「N-P型 > 不定型」という関係に、統計的な有意差が認められた(図3)。

主張性の型の得点による高群、低群の青年用適応感尺度の比較

青年用適応感尺度の下位尺度得点の合計である「総合計」および各下位尺度について、主張性の型の各得点で高群、低群に分類し、その2群でt検定

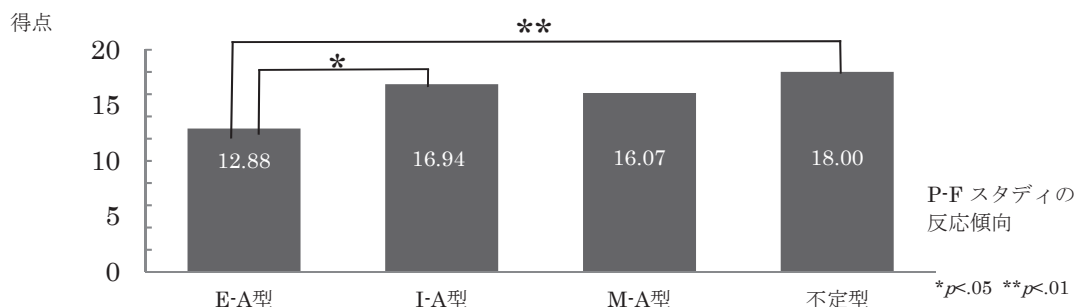


図2. 主張性の方向による4群の青年用適応感尺度の平均値 (「被信頼・受容感」尺度)

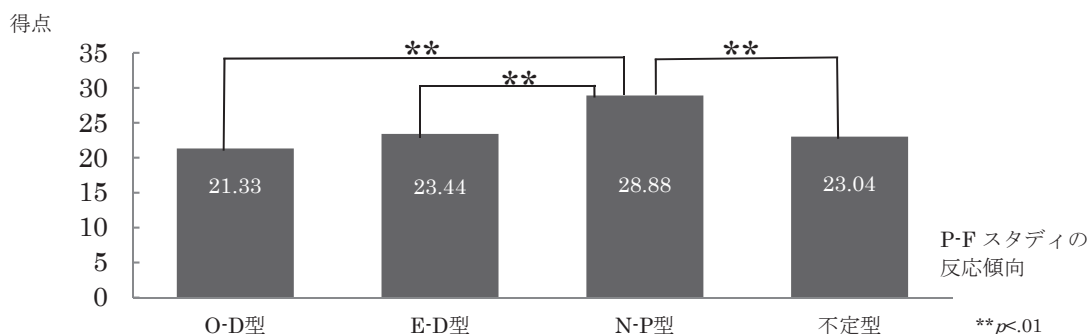


図3. 主張性の型による4群の青年用適応感尺度の平均値 (「課題・目的の存在」尺度)

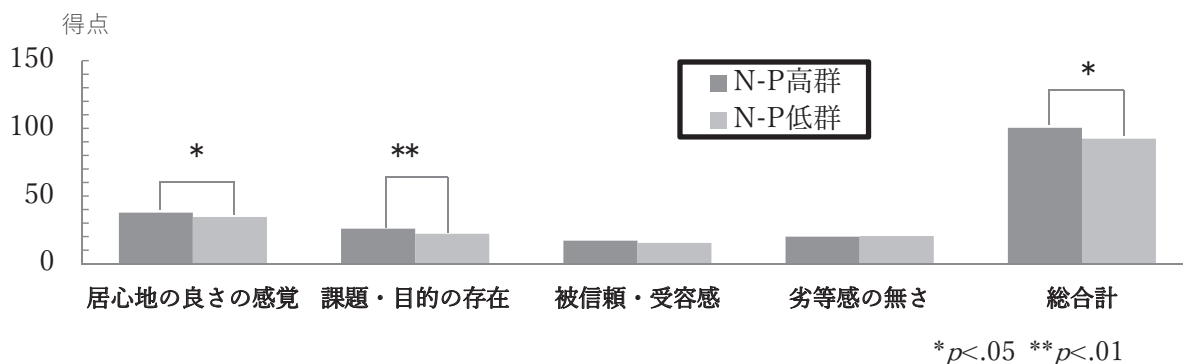


図4. N-Pの高群と低群のt検定の結果

を行った結果、O-Dの高群は、「課題・目的の存在」尺度において、低群よりも有意に低い得点を示していた ( $t(64) = -1.732, p < .05$ )。N-Pの高群は、「居心地の良さの感覚」尺度 ( $t(64) = 1.932, p < .05$ )、「課題・目的の存在」尺度 ( $t(64) = 2.893, p < .01$ )、「総合計」 ( $t(64) = 1.923, p < .05$ ) において、低群よりも有意に高い得点を示していた (図4)

そのため、欲求不満場面で問題解決に向かう特徴が、主観的適応の高さと関連があるのではないかと推察される。

### 考察

青年用適応感尺度の総合計と各下位尺度得点と、P-Fスタディ青年用のスコアリング要素との関連をみてきた。P-Fスタディ青年用の主張性の方向においてはI-A、主張性の型においてはO-D、N-Pとの関連がみられた。また、判定可能な場面数(24-U)や超自我因子E+I%との関連がみられた。このことから、判定可能な場面数(24-U)と超自我因子E+I%、i、O-DとI-A、N-Pが主観的適応に関連していることが示された。

「判定可能な場面数(24-U)」は、「課題・目的の存在」尺度と、「総合計」でも相関がみられた。全24場面からUを除いた反応、すなわちスコアによる分類が可能である、明瞭な回答が出来ることは、主観的適応と関連があると考えられ、課題や目的があることによる充実感の高さはN-Pやiに示されるような、自主的に問題解決のために働きかける傾向と関連があると考えられる。

E+Iとの関連においては、周囲から受容されている感覚が低い人は、弁明してよい場面での主張も難しいのかもしれないと推察された。

内容分析においては、相手に対して丁寧な言葉づかいであるなど、冷静な反応や、正当な主張と思われる反応が多くみられた。やや攻撃的であるなどの反応が一部あったが、正当な主張が出来ている反応が多かった。そのため、周囲から受容されている感覚があることと、弁明してよい場面で、相手に対して攻撃的にならず、正当な主張や弁明が出来るということは関連があると考えられる。

E-Aは欲求不満の原因を外部に求める、他責的傾向であり、I-Aは欲求不満の原因を自己にあるとする自責的反応である。E-A型が最も低く、特に対極的なI-Aや、主張性の方向が偏らずバランスのとれた不定型に比して低いという結果であった。これらから、欲求不満の原因を外部に向ける学生は、周囲から期待され、受容されている感覚を感じられていない傾向があると考えられる。

主張性の型、方向と青年用適応感尺度の関連では、O-DとN-Pに関連がみられた。不平不満を表明する反応であるO-Dと、問題解決の意欲と関係している反応であるN-Pという反応がみられたが、これは、時には不満を表明し、時には問題解決のために能動的に関わる傾向があるのではないかと考えられる。対人関係において、必要な場面では不満の表明が出来、問題を他者のせいにせず対人関係を築く、つまり、両者のバランス感覚がある学生が、主観的な適応感を感じて学生生活を送っているという傾向があると思われる。

N-Pは、欲求不満によって阻害された欲求の充足を求める固執的反応である。O-Dは、欲求不満が生じた事態に向けられた反応である。E-Dは、欲求不満によって生じた心理的不安定を回復するために、自分や他者に向かってなされる、自我防衛的で直接的な反応であり、攻撃と最も密接に関連した反応である。そのため、問題が起こったときに、欲求不満を人や状況などの外部に向けるのではなく、解決のために何かしらの行動をとることが出来る人は、課題や目的があり、充実感を感じて学生生活を送っているのではないかと考えられる。問題解決の意欲は、課題や目的に取り組む過程において、困難な状況や問題が起きた時にも必要である。そのため、他の型よりも、N-P型の得点が有意に高くなったのではないかと推察される。N-Pに示されるような問題解決への意欲は、課題や目的に取り組む過程において、困難な状況や問題が起きた時にも必要であると思われるため、他の型よりもN-P型の得点が有意に高く、特徴的な結果になったのではないかと推察される。

O-Dの高群と低群においては、「課題・目的の存在」尺度にのみに差が認められた。高群は、低群よりも有意に低い得点を示しており、課題や目的があり、

充実感を感じている人は、欲求不満によって生じた事態に対する被害の程度を訴える反応である O-D の得点が低いという結果であった。秦 (2010) は、O-D は「抑止的で感情的反応であるために、欲求不満に対して消極的な反応であり、相手に直接表現できない対人関係の脆弱さを示す反応とみられる。」と述べている。つまり、欲求不満によって生じた事態に対して感情的にならず、対人関係において被害の程度を訴えない学生は、学校生活で課題や目的があることによる充実感が感じられているという傾向があると考えられる。

E-D の高群と低群においては、いずれの尺度にも差は認められなかった。E-D は欲求不満によって生じた心理的不安定を回復するために、自分や他者に向かってなされる、自我防衛的で直接的な反応であり、攻撃と最も密接に関連した反応である。そのため自分や他者に対する直接的な主張性は、主観的適応に特に大きな影響を与えていない可能性がある。

N-P の高群と低群においては、「居心地の良さの感覚」尺度と「課題・目的的存在」尺度、各尺度の「総合計」の計 3 つで差が認められ、いずれも高群は、低群よりも有意に高い得点を示していた。つまり、欲求不満場面で問題解決に向かう N-P の特徴が、主観的適応の高さと関連があることがここでも示された。青年用適応感尺度の「総合計」の高さは、自分自身が主観的に環境と適合していると感じられている、つまり、主観的適応を感じられている人である。そのため、問題解決の意欲を持ち、自分から問題に働きかける建設的な反応を示す人が、主観的適応が高いという傾向があると考えられる。

結果をまとめると、欲求不満場面において被害の程度を訴えたり、他者のせいにならず、また回避せずにその場にかかわり、自分の気持ちを表現出来ること、さらに必要な場面では正当な主張が出来ること、そして責任感があり、欲求不満の解消を求めて、問題に自分から働きかけられるという性格特性を持った学生が、主観的適応を高く持っているといえる。

これらの、個人の対人場面における主張性と主観的適応の関連の結果を、学生相談や、学生のサポートに携わる人々に提示することで、主観的適応が乏しく、不適応を起しやすいう学生を把握し、不登校

や留年などの問題が起きる前に、いち早く学生に働きかけるために役立てることが出来、学生自身のサポートにも寄与出来ると思われる。

また、秦 (2007) は、P-F スタディ 青年用の反応の一般的傾向として、対象者によって多少異なるが、しばしば E-A に対して I-A, M-A の反応が対極となり、O-D に対して E-D, N-P の反応が対極となる傾向があると述べている。本研究での結果も、主張性の型においては、不平不満を表明する反応である O-D と、問題解決の意欲と関係している反応である N-P という、それぞれ対極となる特徴をもった反応がみられた。そのため、I-A の自分に責任があると考え、自分に非があるときは素直に謝罪出来るという特徴と、N-P の自主的に問題解決のために働きかけるという特徴が、主観的適応と関連する性格特性の中心となっているのではないかと考えられる。大久保ら (2010) が、大学生を対象とした、学生の進学動機の違いによってどのような大学生活の要因が適応感に影響を及ぼしているかを検討する研究において、進学動機がなく入学した学生にとって大学の自由な雰囲気は不適合になりやすく、適応の問題を抱えるかもしれないと考察しているが、本研究では「課題・目的的存在」尺度に多く関連がみられたため、進学動機など、自分なりの目的をもって学生生活を送ることが、学校への適応において重要であると示唆された。これらの、先行研究と本研究の結果の比較からも、個人の性格特性の一つである主張性は、主観的適応を左右する要因となるのではないかと推察された。

今後の課題は、対象者数が少なく、女子の統計的な検討や男女の比較などを行えなかったため、さらに対象者を増やす必要がある。大学の雰囲気や学生の男女比、大学の特徴との関連を考慮することで学生の主観的適応について新しい知見が得られると推察される。

## 引用文献

- 秦 一士 (2007). 新訂 P-F スタディの理論と実際, 北大路書房  
 秦 一士 (2010). P-F スタディ アセスメント要領, 北大

路書房

- 今林 俊一・有馬 博幸・川畑 秀明 (2009). 教育実地研究に関する教育心理学的研究 (10) 鹿児島大学教育学部研究紀要, 10, 108-121.
- 石田 靖彦 (2003). 学級内の交友関係の形成と適応過程に関する縦断的研究 愛知教育大学研究報告, 52, 147-152.
- 石田 靖彦 (2006). 学校への適応を媒介する要因としての児童・生徒間関係 愛知教育大学研究報告, 55, 103-109.
- 石本 雄真 (2010). 青年期の居場所感が心理的適応, 学校適応に与える影響 発達心理学研究, 21, 278-286.
- 石本 雄真・久川 真帆・齋藤 誠一・上長 然・則定 百合子・日潟 淳子・森口 竜平 (2009). 青年期女子の友人関係スタイルと心理的適応および学校適応との関連 発達心理学研究, 20, 125-133.
- 磯部 有希・上村 佳世子 (2007). 大学への進学動機と学校適応感との関連 文京学院大学人間学部研究紀要, 9, 51-61.
- 満田 健人・明翫 光宜・辻井 正次 (2009). PF スタディ反応における広汎性発達障害児と定型発達児の比較研究 小児の精神と神経, 49, 221-230.
- 大久保 智生 (2004). 新入生における大学環境への主観的適応に関するPAC (個人別態度構造) 分析 パーソナリティ研究, 13, 44-57.
- 大久保 智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因——青年用適応感尺度の作成と学校別の検討——教育心理学研究, 53, 307-319.
- 大久保 智生 (2010). 青年の学校適応に関する研究 関係論的アプローチによる検討 ナカニシヤ出版
- 大久保 智生・川田 学・江村 早紀・折田 祐希 (2010). 大学新入生の自律的進学動機が大学生活への適応に及ぼす影響 香川大学教育研究, 7, 71-88.
- 大久保 智生・青柳 肇 (2003). 大学生用適応感尺度作成の試み—個人—環境の適合性の視点から パーソナリティ研究, 12, 38-39.
- 大久保 智生・青柳 肇 (2005). 大学新入生の適応に関する研究: 社会的スキルは後の適応を予測するのか? 人間科学研究, 18, 207-213.
- 太田 伸幸 (2004). 大学適応感の変化と対人関係認知との関連 日本教育心理学会, 46, 160.
- 太田 伸幸 (2006). 意欲低下に関わる要因の検討 日本教育心理学会, 48, 123.
- 太田 伸幸・甲村 和三・児嶋 文寿 (2008). 大学適応感の変化に関する一考察——教職課程履修生を対象とした縦断研究より—— 愛知工業大学研究報告, 43, 1-10.
- 佐々木 正宏 (1992). 適応の基礎 大貫敬一・佐々木正宏(編) 心の健康と適応 福村出版, 123-144.
- Rosenzweig, S (1978). Aggressive Behavior and the Rosenzweig Picture-Frustration (P-F) Study. New York:Preager.
- (秦 一士 (訳) (2006). 攻撃行動と P-F スタディ 北大路書房)
- 嶋 信宏 (1992). 大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果 社会心理学研究, 7, 45-53.
- 鈴木 健一郎・新井 邦二郎 (2014). 大学生の主張性と適応について——自己表明・他者配慮と外的適応・内的適応との関係—— 東京成徳大学臨床心理学研究, 14, 33-41.
- 塚田 知香 (2014). コミュニケーション能力向上を目的とした体験学習の実践——ソーシャルスキル尺度による効果評価—— 経営論集, 3, 25-32.
- 植村 善太郎・小川 一美・吉田 俊和 (2001). 大学生の適応過程に関する縦断的研究 (2): 大学生の学習への取り組み, および大学生生活満足感に関連する要因の検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 48, 29-43.
- 渡部 玲二郎 (1999). 対人関係能力と対人欲求の関係 心理学研究, 70 (2), 154-159.
- 渡部 麻美 (2010). 高校生の主張性の要件と友人関係における行動および適応との関連 56 心理学研究, 81 (1), 56-62.
- 八木 成和 (2016). 男子大学生の大学生活への適応に関する研究—対人関係の困り感と適応感, 自尊感情との関連— 四天王寺学園紀要, 26, 163-174.
- 山田 ゆかり (2006). 大学新入生における適応感の検討 名古屋文理大学紀要, 6, 29-36.

(2018. 11. 5 受稿) (2019. 9. 13 受理)  
(ホームページ掲載 2019年10月)